復興とは、悲劇を十字架として生きていく決意から

震災直後の町や行政の機能が壊滅の混乱の中で津波被害で亡くなられた方々の弔いがどうなされたのか、その側面の報道は殆どマスコミからは聞こえてこないことが気になっていた。

そこを知ることこそ、あの大災害の真実に迫れるのでないかと思っていた。

それに応えてくれそうなルポの書「遺体～震災、津波の果てに～」が１０月に出版されたことは知ってはいたが、悲惨な遺体の状況にも触れられているだろうから、読むにはそれなりの覚悟が必要と思い躊躇していたが、「今年を忘れてはいけない！」と覚悟を持って購読した。

著者はルポタイターで、震災直後から３ヶ月、週末の東京への帰省以外は釜石に入り続けて、遺体に係わった人々への取材に基づく書であった。

行方不明者の捜索に携わった警官、自衛隊員、海上保安員、見つかった遺体を安置所まで運ぶ任についた市職員、安置所に毎日通って遺体とご遺族に話しかけ続けた民生委員、安置所での遺体の検案や検歯に携わった町の医師や歯科医と歯科助手、予想のつかない遺体数から土葬への判断を迫られた市長、他県の火葬場まで遺体を搬送する任を頼まれた消防団員、遺体の保存法等に苦慮・苦悩する葬儀社社員、安置所に毎日通ってお経をさむけ、なお身元不明者の遺骨を預かった住職、等々、一人称で語られているそれぞれの体験記でもあった。

それぞれの体験が一人称で挿話されているだけに、単に事実羅列のルポ記でなく、その人の遺体や遺族に向き合うその時々の戸惑い、葛藤、そして、人違いなく一刻も早く家族に会わせて上げたいとの一念で行動した想いも語られており、正に、大震災そのものの真実として迫るものがあり、胸に混み上げてくるものが何度もあった。

それにしても、身内、知人の安否確認もままならない中、また、遺体の中に友人を見つけるという惨状の混乱の中でも、遺体や遺族にかくも真摯に敬けんに接し得るとは…、ただただ敬服する。

著者は、「復興とは家屋道路や防波堤を修復して済む話ではない。人間がそこで起きた悲劇を受け入れ、それを一生涯十字架のように背負って生きていく決意を固めてはじめて進むものなのだ。」と言い切る。

TV 等の報道では、遺体の状況に触れる側面のある報道にはやはり躊躇があるだろうからこそ、こうしたルポの書が多くの人の目に触れてもらいたいと、強く思う。

阿部幸泰　　（2011 年 12 月 23 日　記）